
精霊術師と三人の魔導師たちと

銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊術師と三人の魔導師たちと

【Nコード】

N7009X

【作者名】

銀

【あらすじ】

身体が縮んだ。コナン君現象だと……！？ しかも魔力も無くなっただと……！？ あと一歩で局員全員の弱みを握れたというのに……まあ、いいか。とりあえず金品掻っ攫って新しい人生を謳歌しよう。そんな物語。

Prologue (前書き)

精霊術に関しては色々な作品の設定を拝借しておりますので、「
ん？ 見たことあるぜよ」と思った方、どうか暖かい目で見てやっ
てください。

Prologue

パリッ

「やっぱりポテチは元祖、うす塩味に決まってるね」

それが遠くで広がるファンタジックな光景を見ながらの第一印象だった。すっかり咀嚼しながら、きつとこの思いは最後まで一貫して頭に残るだろうと思ったりもする。それは、そのファンタジックな光景が俺にとって見慣れた光景の一つでしかないから。

町から数キロ離れた海面に、光芒は傍若無人に鎮座していた。周囲との調和を完全に無視したその光景は、町の住民が見れば空いた口は塞がらない代物である。

いくら結界が張ってあるとはいえ、この管理外世界 地球で魔法を乱舞させるなんて正気の沙汰とは思えない。管理局的でありだとしても、この国の法律は余裕で破っている。

自分たちの法さえ破ってなければ……それでいいのかねえ。

その個人の価値を優先する振る舞いに、思わずこう言いたくなる
いいぞ。もっとやれ！

繁華街の高層ビル、その屋上のフェンスに腰を掛ける俺はクスリと笑って、中空に乗るポテチさんを風の精霊を使って口に運ぶ。そんでもって膝元に座る緋菜の頭を撫でる。

綿飴のようにふわふわしたウェーブを描く金色の長髪は指を走らせるとサラリと流れる。俺と同じく正面を向く緋菜の顔は伺えないが、心地よさそうに大きな碧眼を細めているのはまる分かりだった。緋菜に向けた視線を海面に引き戻す。

風の精霊を使って”見て”いるから自分の目は必要ないのだが、気持ち的な問題だ。

海面では、常人ごときが理解できる範疇を遥かに超えた非常識が展開されている。

例えるなら、怪獣大決戦。一方は魔力と物理の複合四層式の防衛プログラムを持つ触手やらなんやらがうようよしている本物の怪獣。肉眼で見れば背筋が凍り付きそうなくらいに不気味だ。どれくらい不気味かというと……やっべ、これマジやべえ、どれくらいやばいかというと、マジやべえっすわ、マジで　くらいだな！

もう一方は人間。数はいっぱい。お約束だな。

だがお約束は数だけ。人間側は”質より量”であるべきなのに、

「人間側、強っ」

こういう場合はBランクの魔導師が多数と少数のAランクであるうに、一人一人がA A Aランクは卑怯だ。視聴率の不興を買うだけだ。ただのリンチだ。怪獣乙な展開が見え見えじゃないか。

心情は怪獣の味方をしつつ、だからといって介入するつもりもな

く傍観に徹するのは行く意味がないから。俺一人が怪獣の味方をしてもあの戦力差では勝敗が目に見えている。しかも小さくなり、かつ魔力が切れているこの身体じゃ、ねえ。

状況は終始人間側の有利にあつた。

数年前に顔を合わせたことのある守護騎士たちに、彼女達に一步譲るものの十分な実力を兼ね備えたおよそこの小さくなった身体と同年齢の少女たち。

だが、それ以上に目を引くのは、

「化け物だな」

やはり少女たちと同年齢の少年二人。

あれはなんだ？

人間の魔力保有臨界点を明らかに超えている。放たれる砲撃が空間に干渉するほどの威力は、現代の技術で作成されるデバイスでは不可能だ。

ロストロギア。思い付くキーワードはこれと人造魔導師しかないのだが、これまたロストロギアは個人の人間の扱える代物ではないし、人造魔導師も現代の科学ではあそこまで強化はできない。

その二人がトドメとばかりに叫んだ巨砲で怪獣は完全消滅した。

「……………」

邪気。そう邪気のようなものを感じる。あの二人からは底知れない何かが潜んでいる。そう思うざるを得ない猜疑心が粘土のようにへばり付いて離れない。

今こそ晴れやかな笑顔で勝利の余韻に浸っているものの、渦巻く邪気のようなものが俺の不信感を募らせる。

「……おにいちゃ？」

「！ん、ごめん緋菜。ちょっと不気味なものを見てね」

「んー？」

緋菜に風の精霊は扱えないので、あの光景を見ることは不可能。星空を見上げているだけだったが、俺の感情の波が揺れたことに気付いたのだ。

義理でも、流石我が妹！

「何でもないよ」

緋菜をギュッと抱きしめて俺はゆっくり飛翔してその場から離れる。

光を屈折させて姿を消してはいるが、あの分けワカメな二人が気付かない理由にはならない。

未だ風の精霊が送る映像を脳内で見ながら、俺は結界の外へと向かった。

M a i n E v e n t ? 1 (前書き)

フッ。シリアスしか書けねーぜ。

クレイ(いけしゃあしゃあと)

Main Event? 1

あれから五年と半年。

六年前、ちょっとした出来事があったって身体が縮んでしまったが、時を経るごとにきちんと成長をしてくれたのは重畳だ。

肉体年齢はおよそ十五歳。仕方ないから日本の法に乗っ取って義務教育を受けている俺は現在中学三年生にある。学業というのは今まで修めたことがなかったから最初は新鮮だったが、如何せん実際に生きた年齢が他の連中とは違う。精神年齢の違いから小学生時代は本当に辛かった。皆、馬鹿ばっかだもん。

だがその苦痛も中三になると薄れていく。どこか俯瞰して見ているものだからクラスメイトたちの成長を知ると少し感慨深い気もしない。進路の違いとクラス分けで、その数は十にも満たないが。

俺の選んだ中学は、これ以上ないくらいハズレだった。適当に学校名の記したサイコロを緋菜と一緒に「なにが出るかな? なにが出るかな?」とご機嫌に転がしたのだが、まあハズレだった。幸運値が緋菜と違ってマイナスにある俺と一緒に転がしたのが間違いだった。

私立聖祥大付属中学校。私立なんて、ただでさえ学費が馬鹿にならないのに、その上、彼らがいるのだ。

五年半前に風の精霊で見たあの分けワカメども。

クラスが違う。それは唯一の救いだったと思う。あの二人を視界に入れると、冗談抜きで不快感が露になってしまふのだ。

生理的に受け付けられないだろう。

まあ、そんな話は置いていて、

「ハヤテさんよ、ハヤテさんよ」

「なんや、と言わせてもらう前に敢えて言わせてもらうで」

「グラハム・100エーカーである、と？」

「私はキミに心奪われた女や！ プーさん っ、とんでもない
コロボが発生しとる！？」

「どつちがいいと思う？ プーさんが修羅の道を求め、操縦桿を操
つて『はじめましてだね、ガンダム〜！』っていつのと、ハムさん
が森でひたすら蜂蜜をペロペロするの」

「どつちも映像が衝撃的過ぎるわ。プーさんの姿で、プーさんの声
で『僕はキミという存在に心奪われた熊だよ〜』って、どう考えて
も、その存在は蜂蜜やろ」

「プーさん・スペシャル。空中で蜂蜜をペロペロ」

「そこまでいったら機体に乗る意味ないやん。でも、あの世界にプー
ーさんがハムさんの立ち位置におつたら腹筋崩壊は確実やな」

「古来のガンダムファンからは、これ以上ない批判を受けるだろうが」

「私は支持するで。笑いは文化や」

「さすが関西弁を扱っただけあって笑いにお熱だな。半端な関西弁だが」

「それは一人称が『私』やからか？ そうなんやろ。だけど甘い。甘いでクレイクン（キリッ）」

「なるほど、少しでも個性を主張して出番を獲得するためか」

「ああん、言っちゃ駄目や。これから私がちょこつと盛り合わせしたストーリーの独白が始まるはずだったのに」

「どうせ、その盛り合わせは核を担う米が数粒しかないだろうが。米三粒、肉一切れ、キャベツ山盛り」

「チツ。バレとったか」

「仕方ない。俺が完璧な独白を見せてやろう。ストーリーは我が最愛なる妹、緋菜について。起承転結 よし、結は省こう」

「はい、アウトー。結を省くって永遠と語るつもりかいアンタ」

「二十四時間じゃ全然足りない自信はある！」

「相も変わらず物凄いシスコンっぷりやな」

「フフ、キング オブ シスコンと呼んでくれて構わない。」

「大変やな緋菜ちゃんも」

「大丈夫。あの子はキング オブ ブラコンだから」

「ブラジャーコンプレックス？」

「ブチ殺す」

「ちょ、冗談やって！ そんなマジな目にならんとつてや！ 瞳からハイライトが消えとるで！ ブラザーコンプレックスやるッ！」

「命拾いしたな。あと二秒遅ければ真夜中に八神家のインターホンを連打しにいくところだった」

「地味に、いや、完全に最悪な嫌がらせや！ そんなことされたら私もピンポンダッシュがしたくなるやんか！」

「あれは中々スリルがあつたぞ。押したと同時に家主が偶然扉を開けたらどうしよう、そんな緊迫感のある遊びはそうそう見付かりはしない。若い頃は、軒並みすべてを猛ダッシュしながら押したもんだ。やりすぎて最終的に武器を持ち出した家もあつたが」

「な、なんと羨ましいことを……！ くっ、私もやってみたかったけど、昔は車椅子のお世話になつとつたから」

「車椅子じゃ捕まるわな。だが、ハヤテよ。まだ諦めるには早いだろ」

「ま、まさかクレイクン……！」

「きつと、まだいける年齢だ」

「！　そうやな！　諦めたらそこで試合終了やもんな　なんて言うわけないやろっ！　ピンポンダツシュが許されるんは小学校低学年までや！」

「見てみたかったんだがな。中三の女がピンポンダツシュ……。あいたたたた。俺、居合わせたら絶対写真とって翌日の掲示板に貼り付けるわ」

「私のすべてが地に墮ちる瞬間やな。分かります。ちなみに最初に言おうと思うけど、私の名前は確かにはやてや。けどカタカナ変換はいただけん。どこぞの完璧超人の借金執事と誤解されてまう」

「そうだな。口調的にも中の人的にも相沢」

「そこまで！　ネタバレは芸人の心をデストロイヤーする悪魔の囁きや。」

「プーさんの囁き……だと……!?!」

「悪魔や。『あ、熊』なんて無理あるやろ」

「諦めたらそこで試合終了なんだぞ」

「本音は？」

「諦めたら敵チームのドリンク剤に下剤をぶち込め」

「それ無理ゲーやろ」

「同じ形状をした水筒をこちら側で用意して、足が滑ったつって敵陣にぶち込めばミツシヨコンコンプリート。後半戦の敵はケツに力を入れて踏ん張ってるから、ソツと腹を押してやれば爆発は起きる」

「鬼畜すぎる。最凶最悪の監督や」

「俺はただ、限界まで溜め込んで外に出たいと苦しんでいる彼らに協力しただけだ。ボカーンッ！」

「そのボカーンの意味は……」

「ん、口答では、とても言えたもんじゃない。だって厨二に隣接しているお年頃だもの」

「まあ、厨二に隣接しとるお年頃やなくとも口答で言えたもんやないけどなあ」

「ならば敢えて俺が言おう」

「なんでやねん」

ビシッとはやての鋭いツッコミが決まる。

「今日もやるじゃないか、はやて。さすが関西弁を扱っただけのことはある」

「クレイクンも、ナイスボケや。最後の最後で基礎の『なんでやねん』を引き出すその話術。策士やな」

そう言つと俺たちはくつく、と笑つ。

この話題に逡巡もなしについて来れるのは、マニアックなネタと頭の回転力を兼ね備えるはやてしかないだろう。

どんな無茶難題の振りをかましても打てば響くように返ってくる。彼女との出会いだけがこの学園に来た唯一の利点と言えるかもしれない。

あの五年半前の出来事の該当者、あの二人の知人であったため初めは敬遠していたが、同じクラス、席が隣になって触れ合つてみると見事に意気投合。やばいくらいに楽しい。

「はやてちゃんと時神くん、本当に仲がいいね」

と、控えめな声はやての後ろの席から入る。

「当たり前や、すずかちゃん。クレイくんは将来の相方候補生やからな」

「候補生かよ」

別にシヨックでもなんでもないが、ツッコミは必要なので入れてみた。

展開についていけず、ずっと聞き手に回っていた少女は月村すずか。深い紫色の波を打った長髪、それに乗る白いカチューシャ。アメジストの瞳。

容姿、発育共に非の打ち所のない美少女だ。多分、学園で一番俺

の好きなタイプだと思う。はやても美少女といえば美少女だが、身体の発育は、……乙、だ。

「なんや、今、不愉快な電波を受信したで」

「木の精だ」

「字が違わないかな？」

「月村、これはワザとだ。はやて、続けるがいい」

「……なんか納得いかんけど、まあ流しといたる。この海鳴市ならクレイクンは指折りの素養の持ち主やけど、関西にはそれすらも越える漫才師がごまんとおるんやで。街角のおばちゃんですら並々ならぬ力量を持つておる」

「誇張しすぎじゃないか？」

「かー！ これやから田舎もんは」

なんか凄い残念なものを見るような目をされた。非常に不愉快だ。ぶん殴つてやるうか。

「というかお前もその田舎もんだらうが」

「心の話をしとる」

「まあ、ウザい」

「黙つてきけ」

ニツコリと笑う俺とはやてのソレはメンチの切り合いと同じ意味であった。

「クレイくんとすずかちゃんは、もっとバラエティ番組を見るべきや！」

「え！？ 私も？」

反応したのは月村だった。

「俺はともかく、月村は確かにもっとレパートリーを増やすべきだな」

「私……結構、本読んでるよ」

それは休み時間の行動から察するが、

「違うねん！ 今はそういう話をしてるんちゃうねん！ ええか、すずかちゃん。これから先、波のように押し寄せる登場人物に負けだけのインパクトを習得せんと、空気キャラなんて悲惨なポジションに左遷されてしまっくんや。」

例え名前が出て来たとしても『あゝ、そんな奴いたな』ってあっさり幕を降ろされるんや！ 一発芸人と同じ末路を辿ることになるんやで！？ それでいいんかすずかちゃん！」

はやての演説じみた説教が熱を帯びる。

穏やか、優しい、大人しい、読書好き……確かに、いつからか扱

いが難しくなつて脇役に左遷されそうなのは同感だがな。

「押し寄せる登場人物……？」

「私たちはフィクションやから当たり前や！」

「はやて、それは危険だ。自重しろ」

「なに甘つたれたこと言つとるん！？ 媚びず、退かず 自重せず！ はやて仕様お笑い三原則を忘れたんか！ あの夕日に掲げ誓つたコンビの絆をッ！！」

「候補生つて言つてただろお前。漫才は終わったんだ、さつさと正気に戻れ」

「いやや！ 今日こそはクレイクンに関西のおばちゃんの強力さを！ すぐかちゃんに空気キャラにならんための秘技を叩き込んだる！」

完全に熱血スイッチがオンになったはやては周囲の目を気にせず、勢いよく立ち上がつて握り拳を作つた。

置いてきぼりの俺と月村は何とも言えない苦い顔をする。これから起こる出来事が手に取るように分かつてしまった。

このままではホームルームが始まっても語り続けそうだ。

仕方がない。

「まずは、重症のすぐかちゃんからやあ！」

ガサゴソ（はやての机、物色）

「ええ!？」

タータラ、ララララン（ハリセンGetだぜ）

「すずかちゃんのインパクト上昇には、その豊満な肉体を駆使する必要があるんや」

はい、せーの

「とりあえず、まずは脱いでみよ」

バッチコオオオオーンッ!!!

「ぎゃあああああああああああ!?!？」

はやて専用ハリセンMk-2と太字で書かれたハリセンで思い切り顔をシバく。頭ではない。より強い苦痛を求めての行動である。

回避も防御も間に合わないはやては盛大に後ろへずっこけた。痛い痛いゴロゴロ転げ回る。

「悪は去った」

「あ、ありがとう……?？」

血糊を払い退けるような動作をしてハリセン（戦利品）を自分の机に仕舞ったところでスピーカーからチャイムの音が鳴りはじめた。

「目が！ 目があああ！？」

なんて言う何処そのムスカ大佐はスルー。いつまでネタに走るつもりなんだ。

あっさりはやてを見捨て、他人のふりをして他所を向いていると、不意に教室のドアが開いた。

カツ、カツ、カツ、と凜々しい足音を立てて現れた一人の男。一見すると青年実業家を思わせる風貌をしている。くせっ毛の金髪に、しかしまだ少年のあどけなさが残る面立ち。

着こなしている服は 軍服。

「諸君、朝の挨拶。則ち、おはようという言葉はこの私、グラハム・エーカーが慎んで贈らせてもらおう」

前時代がかった口調を好み、その行動も基本的スティックそのものな古典の教師兼、我らがクラスの担任は『サムライ』や『武士道』という言葉がすんなりと馴染む……ような態度を取っている。

俺は斜め後ろの席に座り、苦笑する月村にコソツと囁く。

「あれが分かりやすい、主役級争奪戦で長生きしそうなタイプだ」

「な、なるほど。確かに変わったもんね。山田先生」

その言葉にピクツ山田は耳聴く反応した。

「月村よ！ 私はグラム・エーカーと名乗ったはずだ！ 気を付けてもらおう！」

「す、すみません！ ……でも、山田太郎先生ですよ？」

「グ・ラ・ハ・ム・エ・ー・カ・ー！！！」

「山田だろうが。00が放送された途端、髪型に髪の色、口調に性格、体つきまで散々いじくり回して。山田太郎のくせに、グラム・エーカーって、影響受けすぎにもほどがあんだろ」

「時神、お前もか！ いつまでも仮の名前で呼びおって」

「うん、仮が逆だから」

「ええい、このままでは埒外あかん！」

お前があかなくさせているんだ。

山田は険しい表情で一步下がると教卓に乗せた帳面を開く。

「トランザム（出席確認を取る）！」

馬鹿がいる。阿保がいる。厨二がいる。批判きそつだ。

適当な発言ばかりするものだから一々翻訳をしなければ収集が付かない。

「少年！ 少年！ 少年！」

ほら、意味が分からない。これが出席確認というのだから、きつと彼は終わっているのだ。主に頭が。

クラスメイトたちも、もう慣れたのか出席番号順に「はい」「はい」とテンポよく返事をしている。きつと、この一年の時を過ごし卒業して新たな地へ飛び立つ彼らは常人ならざる順応性を開花させているに違いない。担任の頭が弱いから。

「痛た……。ようやくムスカも収まってきたわ」

今まで山田にも構ってもらえず、いい加減淋しかったのか、はやくは起き上がり席に着く。

……………。

「またシバかれないか、はやて」

伝わる。ムスカも収まってきた、で伝わるのだが、いつまでもギヤグに突っ走って変な表現をするのはいただけない。ただでさえ山田という馬鹿がいるのに、はやてという阿保まで混ぜたら、教室は永遠にカオスだ。

「冗談や。ようやく私の熱きパトスも収まってきた」

「……………まあ、よしとしよう」

疑心は解けなかったが、ハリセンを炸裂させるのはやめておく。

「ハム先生は今日も元気やな」

「うっざいだけだ」

溜め息と共に頬杖を着く。

「それも分かるけど、それ以上に楽しくないか？ あんな濃い教師は他におらんとと思うで」

「あんなものがちらほらいてたまるか」

学校に二人もいれば崩壊は免れない。

「少女！ 少女！ 少女！」と連呼して、ようやくブツ壊れた出席確認が終わる。平静を保つクラスメイトたち。本当にこいつちの順応性の高さには感心すらも覚えてしまう。

山田（絶対にグラハムなんて呼んでやらん）は出席名簿を畳み、「全員出席だな」と満足げに頷くと教卓に両手を着いて生徒を眺める。

「諸君、この私、グラハム・エーカーが勤める今日の体育は二組の時間割変更に従い、彼らと合同となる」

……………えー。

山田から齎された言葉は俺の気力を根こそぎ奪ってしまう残酷なものだった。ざけんな、と声を張り上げる気も湧かないくらい、とんでもない脱力感に襲われる。

「なのはちゃんらのクラスやな」

「楽しみだね」

ああ、お気楽なはやてと月村が羨ましい。中空に『 』なんて浮かしゃがって。はやてはどう考えても『禁』だろうが。

「なんや、また不愉快な電波が」

「木の精だ」

「二度ネタはタブーや」

「鬼の精だ」

「よし」

「よし、なのかなこれは？」

「すずかちゃん。世の中すべてのもんを受け止めるなんてできへんのだ。必要性のあるもんだけを見抜いて生きる。それが大人というもんや」

「格好いい発言だけど、使いところのせいで素直に頷けないよ」

「ぼーややからな」

クールにフツと笑うはやてはハリセンでやんわりと叩いておいた。ツッコミ待ちだったし、俺も少しでもストレス発散をしておきたか

ったから円満に終わる。

しかし鬱々とした気持ちが消えることはない。

それもそのはず。二組には俺が敬遠している二人が所属しているのだ。

確か……天之川 刹那とゼロ・レオンハルトだったか。

なんとも厨二臭い名前である。

ちなみに俺は、昔日本人の女性に引き取られて、時神の日本姓を得たので名前のクレイに漢字はない。馴染む漢字が存在しない。

それはともかくこの二人と対面するなんて虫酸が走る。食わず嫌いならぬ会わず嫌い、だが、そう思っても仕方ないほどあの二人からは異質な空気を感じる。

山田にそれだけは、と懇願したいのだが、山田にそんな言葉を口にするのも虫酸が走る。

「教師として公平なジャッジをしなければならないが、担任として敢えて言わせてもらおう！ 必ず勝利するのだ！」

死ねばいいのに。

決め顔で激励を飛ばす馬鹿に本気の殺意を抱いた。

風の精霊を使役すれば、窓から駆け抜ける春の陽気なそよ風一つでヤツの首を”ポロリもあるよ”にできるのだが。

仕方ない。サボるか。

「時神、サボりとは関心できんな」

「……山田」

なんで、気付いた？

「心眼は鍛えている。そして、私は山田などという名ではなく、グ
ラハ」

「あー、分かった分かった。ハム先生。これでいいだろ」

「うむ！」

「いいんやな」

この馬鹿なら体育の時その場にいなかったら校内放送や自分の手で探し出したりだって、平然とやりそうだ。ていうか、絶対やる。

そんな迷惑なことをされ、なおそんなことで有名になるなんて、いよいよハムを微塵切りにしなければいけないくなる。

「……ちゃんと授業に出ればいいんだろ」

「分かればよい」

上から目線……！！ このハム野郎……！！

「クレイクン、どげどげ」

「ああ、分かっているよはやて……！ やるなら夜道で背後から、だろ。上手くやるさ」

暗殺か。ピンポンダッシュで培った、人込みや自然の一部と化して行動する能力を使えば余裕だな。

「そうそう、抜き足差し足忍び足　グサアッ！　って阿呆ッ。そんなこと言つとらへん！」

スパン！

奪ったハリセンを取り戻したはやてが俺の頭に一閃。

「大体、ハム先生をやって警察のお世話になるなんて、損失以外のなににもんでもないで」

「それもそうだな」

殺す価値もないとは、まさにこのことだ。

「お前たち、本人を前にいい度胸だな」

おっと聞こえていたか。

「まあ、多少の暴言は認めよう。私も大人だからな」

「アリガトウゴザイマース（棒読み）」

俺も大人だから多めに見てやる。良かったな。

ようやくハムは俺から視線を外し、何か言おうとしたが、腕時計で時間を確認すると、

「もう、こんな時間か。今日は一時間目から私は授業ある。連絡事項は述べたからホームルームは終わらせていただく」

有無を言わず一方的にまくし立てると、ハムは淡々と教卓に置いた所持品を回収して外に出て、

「しからは」

ピシヤリと教室のドアを閉めた。

数秒間、いたたまれない空気が教室を支配したが、時を経るに連れて活気を取り戻す。

「あの男のワンマンっぷりもあそこまでいけば逆に清々しいな」

「ゴーイング マイ ウエイやもんな。これは当分、主役級の登場は確保されたも同然や」

俺としては是非とも遠慮したいのだが……

「ここぞって時に現れそうだな」

「いいとごどりか、空気をブチ壊すかの二択だな」

どっちにしろ現場にいた者にとってはデメリットでしかない。風

の精霊で常に監視でもしておくべきか？

「いつそ事件でも起きて最初の被害者になってもなってくれれば俺も喜色満面で葬式に出席できるのだが。」

「それよりも」

「はやては怒気を孕んだ低い声を上げた。」

Main Event? 2

「すずかちゃん!」

その矛先は月村へ向けられた。

唐突に怒鳴られた月村は何が何だか分からず、目を白黒させている。

チラツとなぜ怒られたか理由を問う視線を向けてきたが、残念ながら俺もはやての思考回路は理解できない。静かに首を振るうだけだ。

「どうしてさっきのやりとりに一言でいどしか喋らんかったのや!」

「え……ええ!?!」

……ああ、なるほど。と、それだけで理解してしまった俺もなかなか末期かもしれない。

「ハム先生が来る前に言ったばかりやんか。波のように押し寄せる登場人物に負けんだだけのインパクトがないと空気キャラへと左遷されてしまうって。今のすずかちゃんはまさしく空気やったと言えるで!」

まあ、そういうやつって結構いるんだがな。何か意見を言い合ったりはせず、輪に入ってたただ聞き役に徹するタイプは。

物語に必要かどうかと聞かれると、安易には頷けないが。

「こつやって私に怒られてスポットライトを浴びるんもあかん。自然の流れで会話に参加して、シャキンと心地好い言葉を放てるようにならんと、『すずか消えたww』なんて言われるで！ それでいいんかDear Friend!？」

「なんで英語？」

打てば響くような切り返しのチャンスを与えたつもりなんだろうが、しまった。先に俺が言ってしまった。

だが、はやては挫けない。

「よし、すずかちゃん。今のクレイクんのツッコミより一層キレのあるツッコミを見せるんや。ハリセンも貸したる」

半ば押し付けるようにはやてはハリセンを握らせる。

とんでもない無茶ぶりに月村は視線を右往左往させて激しい動揺を見せる。はやてのお笑い魂の熱量を知るクラスメイトたちは冥福を祈りながら、しかし被害が及ばないようにいつでも逃走を計れる距離を取っていた。薄情な連中である。

仕方ないから俺は抜き足ではやての背後に回って、月村と視線を合わせた。

ザ・アイコンタクト。

(ク、クレイクン。どうしたらいいの!?)

(落ち着け月村)

(でもはやてちゃん。鬼のような形相をこっちに向けてくるんだよ!?!? こんなはやてちゃん見たことないよ!?)

(お前の心配をしているからだよ)

(え? 私の?)

(そうだ。親友であるお前が空気となつていつの間にかいてもいなくても同じような存在になることが我慢ならなんだよ。立場を逆転させて考えてみる。お前は嫌じゃないか?)

(……嫌。凄く嫌だよ、そんなの)

(だろ。だからはやてはどんな手段を使つても、変な印象を抱かれようとも、お前に不安や疎外感を与えさせたりなんてしたくないんだ)

(でも……私、どうすれば)

(ツッコミを入れるんだ。今のはやてはそれしか望んでいない。幸いお前には笑いのアルテマウェポンが託されているじゃないか)

(あ……)

(はやての期待に応えるんだ。さあ、思いきり振り上げろ)

(思い切り……)

(手加減は侮辱だ。思いきり振り上げ、思いきり振り下ろせ)

(分かったよ。私、やってみる！)

意を決した月村の顔に最早、迷いはない。

自ら進む道を決めた、強者の瞳をしている。その姿たるはまさに豪華絢爛の凛々しき騎士。

一皮剥けた彼女は躊躇うことなくアルテマウェポンを振り上げる。

教室の騒音が嘘のように静まり返り、無音になったのは俺がこの光景に夢中になっていたからだだろうか。こんな空気、久々だ。成長した人間が見せるオーラを前に、俺は自然と口元が緩んでいた。

もしかするとはやてもそんな表情を浮かべているかもしれない。

成長したすずかの放つ一閃を真っ向から立ち向かうつもりか、一切動く気配はない。

そして、時は動く。

高々と振り上げたアルテマウェポンが手加減なく振り下ろされたのだ。

月村は叫ぶ！

「な、なんでやねん!!」

この時、俺とはやてはすっかり油断していた。

月村すずかという人間の身体能力はとても高い。女性特有の繊細さと、その穏やかな性格からは想像もつかない豪胆さを兼ね備えた彼女は体育において無敗の強さを誇り、男子すら屠り、その名を運動部へ知らしめているのだ。

その実力は俺もはやても知っている　そう思っていたが、どうやら月村は体育の授業ごときで真の力を発揮することは不可能だったのだ。

ズゴオオオーン!!!!

「は?」

目の前の状況が理解の範疇を越えた俺は、らしくない素っ頓狂な声を上げてしまった。

ズゴオオオーン?　何だ、この音は。ハリセンで叩いた音ってせいぜい、バシッだろ?　ズゴオオオーンって必殺技が決まったような音は立たないだろ?

本当に、教室が水を打ったように静まり返る。誰もが啞然として硬直していた。

はやての頭が消えたのだ。ハリセンが振り下ろされたと同時に、まるで跳ね飛ばされてしまったように消えたのだ。

「はやて……？」

机にガクンと身体を垂らせるはやてはピクリとも動かない。まるで死体のように、全身から力が抜け落ちていた。

冷や汗を流しつつ、俺ははやての顔を覗く。

「うわ……」

ハリセンが直撃したであろう後頭部と、机に打ち付けたであろう額に、大きな瘤ができていた。少し離れた位置からでも視認できるくらいポツコリと瘤ができていたのだ。

これには同情を感じざるおえない。ただ勢いとノリだけでモノを言っていたはやてに困らされていた月村を助けるべく、ちよつと脚色付けてはやてを美化して事なきを得ようとしたのだが、まさかの結果。

俺は教室に掛けられた時計で時間を確認する。

「午前八時四十六分……ご臨終です」

「はやてちゃああああん！！？」

月村の悲痛な叫びが胸に響いたのだった。まる。

うああああ……。

声にならない苦痛を上げた俺はグッタリと木に背中を預けていた。

現在の時刻、十二時。ちょうど日がてっぺんに昇る時間帯に、俺はグラウンドの隅の木陰で休んでいた。

四限目は体育だ。

視線を明るい前方に向ければ男子はサッカーを、女子はグループごとに様々な運動をしている。

普段は男子がグラウンドの場合女子は体育館、と場所を交互に変えて行っているのだが、どうやら今日は女子の体育を担当する教師が体調を崩して休んでいるのでハムが女子も纏めて監督することになったらしい。二組との合同のワケもここだろう。

ハムはサッカーの審判に忙しく、男女の面倒を両立するのは難しいため女子には自由行動を与えている。

そのため、

「「「キヤー！ 天之川くん、レオンハルトくん！！」」」

なんて女子の金切り声が晴天を突き抜けるまでに響いていた。

春の寒気は去ったというのに、その悲鳴が三半規管を揺らし、背筋を凍り付かせる。この距離でここまで不愉快な気分になるのだから、サッカーをプレイする男子には堪ったものではない。

天之川、レオンハルト。

女子の視線を釘付けにしている二人は、額に汗を浮かべて爽やかな笑顔で活発に動き回っていた。

紫色の切れ目に魔性の輝きを乗せる鴉の濡れ場色の髪をした長身瘦躯の男が天之川刹那。

紅と蒼。対を為す瞳を持ち、太陽のように光り輝く金髪の方がゼロ・レオンハルト。

二人とも、まあびっくりするくらい均整の取れた顔立ちをしている。絶世の二文字がついても恥ずかしくないくらい美形だった。

男から見ても、女子が黄色い声を上げて目をハートにするのは頷けた。

俺が敬遠する二人。

現在、この二人のせいで体調が芳しくないのだ。

始めて肉眼でしっかりと捉えると、やはり異質な力を感じた。人

ならざるもの、しかもよいといえない力。それが原因か世界を創造したとされる精霊たちが恐れをなして精霊術師である俺に群がってきたのだ。

空気を取り込んで吐き出すことを繰り返して生物が生きるように、精霊も取り込めば何かしらの形で吐き出さないと精霊酔いを起こしてしまう。

あの二人に近付けば近づくほど精霊たちは助けを求めて精霊を取り込む回路を持つ俺に入り込んでくる。集合して出席確認を取っている時は安易に精霊を使役もできないから吐き出せず、ひたすら身体の中に溜め続けるだけだった。よって俺は精霊酔いを起こして授業開始早々にダウンしてしまったのだ。

誰からも距離を取って、ゆっくりと風の精霊を使役し、周囲にそよ風を発生させているから激しい頭痛と吐き気はだいぶ収まったのだが、まだまだ全快にはほど遠い。

「気持ち悪い……。あの二人、いつそ斬り刻むか？」

そうすれば無駄に神経を擦り減らす必要もなくなり、輝かしい学校生活が送れる。

目を細めて殺気を飛ばしてみるものの、反応はいつさいない。鈍いのか、サッカーに集中しているのか。

夜道で背後から。いや、背後からじゃない。夜道で数百メートル離れたところから……。ザクッ！ ザクザクザクッ！！ と挽き肉にしてしまえば完全犯罪の誕生だ。

大丈夫。俺ならできる。ふふ、暗殺なんてゾクゾクするじゃないか。

真つ青な顔で不敵に笑っていると、近付く影が一つ。全方向に発散させていた精霊の流れを変える。

「大丈夫？ クレイくん」

「月村か」

気怠げに顔を上げる。そこには前屈みになって心配そうに見てくる月村がいた。体操服姿の彼女は身体のラインがくつきりして艶めかしい。ハーフパンツから覗く白い足は男子から多大なる視線を浴びそうだ。

しかし今の俺にそんな劣情を抱く余裕なんてない。

「体育が始まる前までは元気だったよね」

「ああ……だが時間が経つに連れて気分は下降していたが」

まだ授業が終わるまで四十分近くある。憂鬱な気分は晴れるどころか積もる一方だ。

そんな俺の隣に月村は座る。

「……いいのか？ 大好きな体育だぞ」

「うん。実は私もそんな気分じゃないから」

「ふうん」

生返事をしたのは彼女は俺と近い理由に感じたから。

月村の視線が誰に向けられていたか、気付かないわけもないが、
敢えて黙殺しておく。

「で、はやてさんは大丈夫だった？」

「あは、は……。まだ保健室で寝てる」

あの凄絶なツツコミに打ちのめされたはやては至急保健室へ運ば
れて、現在も気絶中のようだ。

ちよつとした悪ふざけがこんな事態を引き起こすとは面白い。月
村め、とんでもない才能を秘めていたな。

「あの一撃は最高だったぞ。はやてが目を覚ませば、きっと称賛す
るに違いない」

「それは……。喜んでいいのかな」

親友を滅つしたのだ。いい気はしないのだろう。俺なら「おう、
殺す勢いで振り下ろしてやったぞ」と親指を立てれるのに。

「あ、フェイトちゃんが決める」

月村の視線は別に移っていた。

いつまでもあの二人に囚われるのも癪に障るので、俺も釣られて

見ることにする。

校舎側に構えられたバスケットゴールが二つ。それに白線でラインを書いたコートで女子がチームを複数に分けて総当たり戦に励んでいたのだ。

ちょうどプレイ中の試合に月村の友達が参加していたのだろう。月村の言葉から推察するに、それらしき人物はトリコカラーの七号球を自在に操っている長い金髪が目を引く少女だろう。

月村より若干劣る、しかし平均点は余裕で越えるバランスの取れたポデラインは一切無駄のない軽やかなステップを生み出して他を寄せ付けない速度を形成していた。

舞い踊るように、進路の妨げとなった敵を擦り抜けて跳躍。強靱な足の瞬発力と上体のバランスをを披露したジャンプは彼女を重力から解き放った。

パスッ……

右手に乗せられたバスケットボールは吸い寄せられるようにリングの中に納められる。

「ダンクシュート。さすが外国人ってところか」

何処の国かは知らないが。魔導師ゆえに鍛えているというのもダンクを可能にした一っだろう。

名は確かフェイト……

「フェイト……テスト……テスト……。！ テストゼロテンかつ。フェイト・テストゼロテン・ハラ……孕？」

「フェイト・テスタロッサハラウンちゃん。もう、酷い間違いしすぎだよ。特に最後ののは、絶対に漢字変換なんてしちゃ駄目だからねっ」

「ハラウン？」

「ハラウン」

「フェイト・T・ハラウンね。よし、覚えた。ん？ 覚える必要があるか？ ま、覚えてしまったし、もういいか。」

「見事ダンクシュートを決めたハラウンはチームから拍手喝采を受けて、照れ臭そうに頬を赤くしている。」

「なるほど。弄られキャラか」

「え？」

「何でもない。って、こっち来たぞ」

「視界の隅に映ったのが、ハラウンは月村の姿を認めると小走りに向かって来た。照れ臭さがまた抜けていない紅潮した頬と満面の笑み。手を振って駆け寄って来る様は、端から見れば恋人を見つけた初々しい少女そのものだ。」

「月村も笑顔で返す。」

「おめでとうフェイトちゃん。さっきの凄かったよ」

「ありがとう、すずか」

うお、女子臭がする。はやてからは微塵も感じられなかった女子臭がする。居心地悪ツ。ただでさえ気分悪くて行動不能なのに。

「でも、すずかが敵チームに入っていればきつと無理だったよ。今日は、何処か体調が悪いの？ 保健室に行かなくて大丈夫？ 私、おんぶするよ」

「うん、調子は少し良くないけど、木陰に休んでいれば大丈夫だよ。心配してくれてありがとう、フェイトちゃん」

「症状が悪化したらすぐに私を呼んでね。すぐに駆け付けるから」

「うん、そうさせてもらうね」

と言ってニツコリと笑い合う美少女二人は非常に絵になるつちやなるのだが、このお互いを気遣う優しい絆は俺の肌を粟立たせる。淀んだ俺にこの空気は辛い。

グデーツとうなだれて遂に芝生の上に倒れてしまう。なるほど。これが、顔が濡れて力が出ない現象か。

なんて一人遊びで挽回を計るも、憂鬱な気持ちは晴れない。大きな溜め息が漏れてしまう。

「あれ、キミは………？」

不意に、少しおずおずしたハラオウンの声が降って来た。

「あ……悪い。溜め息が聞こえたか？」

「気にしてないよ。え、と……」

「コルトパイソン田中だ」

「……………え？」

「コルトパイソン田中」

「クレイクんっ」

怒られた。

「冗談だ。もう一回すまん。時神クレイだ。月村とはクラスメイトではやてとは一方的なお笑いコンビの候補生に挙げられている」

「あ。二組のフェイト・T・ハラオウンだよ。よろしくね」

律儀に握手を差し延べるなんて。最近の子供からは絶滅したと噂されていたのに。

素直な奴は好きだ。色んな意味で。感心しつつ差し出された手を握り返す。

「ああ。とりあえずよろしく」

悪い体調を押して、人当たりの良い笑みを小さく浮かべる。

そうしながらも、きつと関わりを持つことはないだろうと俺は踏んでいた。ハラオウンはかなり好感の持てる人柄をしているが、彼女はあの二人の所属する二組にいるのだ。同じ空間を共有するなんて想像するだけで悪寒が走るのに、二組になんて足を運べるわけがない。

「じゃあすずか。私はコートに戻るけど、具合が悪くなったらちゃんと呼んでね。もちろんクレイもだよ」

「うん、ありがとう」

軽快なステップでハラオウンは再び試合へと戻っていく。

「いい子だよ、フェイトちゃん」

「そーだな」

初対面の男子にこの優しさ……。罪作りな女になりそうだ。

まあ、それはそうとして。

「悪い月村。俺かなり限界。寝るわ」

寝ていても精霊の放出は可能だから随分前から取り組もうとしていたものだ。芝生じゃ安眠できそうにないが、この苦行を味わい続けることに比べたら軽いもんだ。

「なら私の膝、使っ？」

すずかは正座して膝を開けた。

「いいのか？」

「少し恥ずかしいけど……クレイクン、本当に具合悪いでしょ。だから、良かったら使って」

見れば月村の顔は少し紅潮していた。

男子に膝枕をするなんて今まで一度足りともしたことはないのだろ。初々しさを感じる。

普通の男なら、同様に顔を赤くしてあわあわと慌てふためくが、俺はそんな常人と掛け離れた存在だ。

「じゃあ、お構いなく」

瞬時決断。

言葉通り、いつさいの躊躇なしに月村の膝に頭を乗せる。柔らかく、温かな感触が後頭部に伝わった。

そういえば膝枕って緋菜によくしているけど、されるのって数十年ぶりだな。

ソツと手の平が頭に添えられて髪を優しく梳かれる心地好さに負けて、俺の意識は闇に包まれていった。

綺麗な吐息を繰り返すクレイの頭を、すずかはソツと撫でてみる。

腰まで届く真っ直ぐで林檎のように朱い髪は小さく細い指の動きに合わせて波打つ。

柔らかい髪だ。すずかは率直に思う。

それに似合っている。学校生活での彼は飄々として掴みどころがなく、しかし軟派というわけでもない。が、家での彼は、妹の緋菜に対してだけは態度がコロリと変わっている。その時の彼に飄々としたものはなく、穏やかで優しい、非の打ち所のない完璧なお兄さんなのだ。数回程度だが、そんなクレイを見ればあの長髪も頷けた。より一層穏やかさを強調するためなのだ。

妹のためならなんでもする。とんでもないシスコン野郎だ。

知り合って、一ヶ月と半分くらい。

きっかけははやてだ。

新学期早々、一新されたクラスメイトの中で二人は視線が重なりと雷鳴の如く衝撃的ななにかが背筋に走ったらしい。

ソクツとではなく、ビビツと。

少女漫画的出会いに憧れる少年少女たちに言わせると、運命的な出会い。

前世はイヴとアダムのような関係だったに違いない　そう感じさせた。

赤い糸で結ばれた、出会うべき瞬間に出会った二人が想いを同じくするのは当然だった。

「なるほど。ボケとツツコミを両立させる存在ですね。分かります」

きっと前世はイヴとアダムのような　ではなく、相方だったに違いない。

笑いの糸で結ばれた、出会うべき瞬間に出会った二人が仲良くなるのは当然のことだった。

その流れで親友のすずかもクレイと親交を持ったのだ。

すずかと思う。

(きっとこの人は私の正体に気付いている)

彼女の血には僅かながらでも人間ではない存在のものが入っていた。

今その話題は無関係なので割愛しておくが、とにかくすずかはクレイが自身の正体について気付いている確信があった。

クレイは精霊術師だ。

世界を創造した逸話を持つ精霊は、魔力素と同様に個我は持たず、しかし知性と生命を持つ存在である。四大元素の風火水土の四つに分類され、常に世界に存在し続ける。しかし公の存在と認められないのは精霊が秘匿されるべき神秘的なものゆえである。

それは精霊と同じく秘匿されるべき悪しき存在を滅するため。

それは世界崩壊の可能性の一つ、科学転用を避けるため。

それは精霊を扱えるものと扱えないもの間に確執を生まないため。

クレイは扱える側にある人間だった。

霊力という、本来見えざるべきに在らぬものを見通す力が、それを可能にする。

妖魔邪霊 人の世に仇為す魔性に抵抗する力を操るもの。

霊力のある者にこそ視認できる精霊と共に魔を滅するもの。

それが精霊術師だ。

そして、不幸にもずかには妖魔と呼ばれる存在の血が含まれていく。

精霊術師が討滅すべき側の存在だったのだ。

すずかには見える。

天之川刹那とゼロ・レオンハルトという、人間とも妖魔邪霊とも
いえない不可解な存在に恐怖してクレイの中に逃げ込む精霊の姿が。
そして精霊酔いに苛まれ、少しずつ精霊を解き放っているクレイの
行動が。

お互い知らないふりをしてただの友人として振る舞っているのは、
いつのまにか暗黙の了解になっていたのかもしれない。

初めこそ警戒していたが、何も言わない、何も行動しない日々が
続いてそれも氷解していた。

だから立場だけ見れば敵対関係の相手に膝枕も許せたのだ。

「好き、なのかな？」

言って、首を横に振る。

この想いはまだ、はやてたちと同様の、友へ向ける想いだ。

そう、”まだ”……。いつの日か、きっかけがあればそれも変わる
かもしれない。

……ええ、マジで？

M a i n E v e n t ? 3 (前書き)

人肉ミンチはいけません。

Main Event? 3

「……イクン。クレイクン」

「ん……」

仮眠していた俺が目覚めるのは早かった。元々寝起きはいい方だし、眠りが浅かったこともあって意識はすぐにハッキリする。

半身を起こして月村の膝から離れると倦怠感が無くなっていることに気付いた。

「終わったのか？」

「うん。天之川くんたちも校舎に戻っていったけど、調子はどう？」

……………。

「だいぶというか全快した。重い病気が完治した時のようなスッキリ感で今なら重力からも解き放てそうな勢いだ。悪いな。もう昼休み始まっているだろうにお世話になりっぱなしで」

校舎の壁の掛け時計で時間を確認。授業が終わって十分も経過していた。

なるほど。それなら全快だっっているか。

が。

「本当に悪い。いつもならはやてたちと昼食取ってただろうに」

「気にしないで。フェイトちゃんには言ってるし納得もしてくれ
たから。それにクレイクんの寝顔って何だかすごくレアっぽいから」

クスツと笑みを零す月村に一瞬言葉を詰まらせる。

「……まあ、確かにレアだな。これ以上ないくらいにレアだ。遊戯
王で例えるとホログラフィックレアカード……いや、モンスターが
飛び出る3Dレアカードが当たるくらいにレアだ」

「まず開発されてないから当たらない、よね？」

「独自開発しなきゃ手に入らないくらいにレアということだ」

「そうなんだ」

「そうなんだ」

いつも一緒に寝ている緋菜にすら見られたことないと思うのだが。
俺が起きたら抱きしめてる緋菜は無茶苦茶苦茶苦茶（誤字にあらす）
可愛らしい寝顔を見せてくれるし。

「自分でもかなり以外だと感じているよ。人前で寝るなんて気絶し
た時くらいだと思ってたが。それくらい体調が悪かったんだろくな」

あの二人エ……！ 極論。襲い掛かって来ないだろうか？ 返り
討ちにして挽き肉にして害虫の餌にしてやるのに。

そのためにはきつかけが必要だな。とりあえずいつも女侍らせて
いるって聞いているから、そいつらを全員寝取れば……

「いや、駄目だな。男の狂言に乗せられる馬鹿女は嫌いだ」

「どうしたのいきなり!？」

月村は驚愕する。

いきなりもなにも、

「どうやって人肉ミンチにしてやるうかって話じゃなかったか？」

「ないよ!？ そんな物騒な単語、カケラも浮上しなかったよ!」

「でも蠟人形は開拓済みだし」

やっぱり新鮮味のあるのは人肉ミンチだよな。店頭に『国産 人
肉ミンチ』……。

いけ ないな。常識的に考えてそんなの扱った瞬間、本店はも
ちろんチェーン店も消え去るな。

だが、それは店頭の場合であって店に出さなければ何の問題もな
いわけで!

余裕で法律違反です。絶対にやめましょう。二次創作だから

と許されるレベルではありません。残酷な描写にも限度があります。

……………チツ！

「で、何の話してたっけ」

「色々腑に落ちないけど……………。寝顔の話だったよ」

「誰が得するんだ。その話題」

「……………私？」

「疑問形ならやめよう。男に関するものでギャグ要素の無い会話に価値はない」

「これがはやてちゃんと共感する理由なんだろうな」

「俺がシリアスの似合うキャラに見えるか？ どう考えても主人公の隣にいるちょっと愉快的サブキャラだろ」

「なんとというか、三枚目？」

「確かに主人公系統って感じじゃないかな」

「ミステリアスな部分もあって裏切り臭がプンプンだな。帰ったら風呂に入るっ」

「自分で言うことなの？」

「さつさと俺の性格を把握しておいてもらおうかな、と」

「誰に？」

画面越しの皆さんに、とは言えない。

「それはともかく、飯いかなくていいのか？ さつさと着替えればまだ間に合う時間だろ」

「あ、そうだった！ じゃあクレイクン、先に行くね」

「おー。また会う日までー」

駆け足で校舎へ消えていく月村に見送りの言葉をプレゼントして、俺もゆっくりと歩き始める。

さっきまで男女が活発に走り回っていたグラウンドはすっかり閑散として、吹く風が虚しさを強調しているように思える。土埃が舞い、土の乾燥した匂いを甘んじて受け入れながら空を見上げる。

『 天之川くんたちも校舎に戻っていったけど調子はどう？ 』

月村が口にした言葉。

「体調を崩した原因……言っただけはただけだな」

だが、月村は言った。

天之川と。その原因を的中させた。

「まあ、元々そうだろうなと感じてはいたけど」

月村は俺が精霊術師だと感覚的に理解しているのだ。

精霊の気配を、彼女は間違いなく読み取っていた。俺が少しずつ放出していることにも、もちろん気付いていたのだ。

その理由は、彼女が精霊術師だから……ではない。

まだ精霊術師の世界に足を踏み入れて六年しか経っていないから決定打に欠けていたんだが、これで得た。

月村すずかは陰である妖魔の血を引いている。

だから陽である精霊を視認できた。

おそらく先祖が何かの妖魔と交配したのだろう。触れたりしないと感じ取れないくらい微々たる力が流れている。

「ま、だからといってどうというわけじゃないんだが」

別に気にしないし。お互い今の関係に満足しているし。

精霊術師は妖魔を討滅する存在　なんだろうけど、そんな使命
どうでもいいし。そもそも受けてないし。定義なんて知らないし。
たまに軽い運動と技量向上目的で狩っているからいいんじゃないの。

俺の力は俺の力。お前の力はどうでもいい。お前って誰のこと？

「でも月村家には精霊に関する書物とかありそうだよな。気になるよな。俺、独学だから精霊に関する知識ってあんまないんだよな」

知識で操るんじゃない、感覚で操ってるからいずれ限界は来る。

いくら精密で強大な技量と経験を保有しても情報が少なければ戦闘の勝率は大幅に下がる。

力でごり押しが通じるのは雑魚戦のみだ。ボス戦では敵の弱点、攻撃手段を見切り、味方と協力してコンボを繋いで勝機を見出さなければならぬ。魔神剣、雷神剣、爪竜連牙斬 インディグネイト・ジャツジメント！！

「技名を猛々しく叫んで恥ずかしくないかね」

「瞬迅剣！」「ただの突きですよね？」「え？」「だから、ただの突きですよね？」「いや、あの」「ただの突きですよね？」「あ、はい……。ただの突き！（泣）」なんて展開はないのか。

「そついや魔導師もコマンドに技名を入れてたよな」

「アクセルシューター！」「アクセルって自動車とかの加速装置のことですよね？ それ加速装置なんですか？」「え？ あ、あの……ゆ、誘導弾です」「加速装置が誘導弾？ ちょっと意味が分からないんですけど、詳しく説明してもらえませんか？」「あ……う……」「どうして吃るんですか？ 何かやましいことがあるんですか？」「ふ……ふええええん！ フェイトちゃんああん！！」とか？

技名付けるとそんな切り返しがありそうで怖いよな。俺は絶対やる。

その時が来れば徹底的に相手の精神をズタズタにしてやろうと笑った瞬間、腹の音が鳴った。

そうだよ、今は昼休みだったよ。

大好きかつ尊敬かつ憧れの兄であり続けるため、規則正しい生活とバランスの取れた食事に気を遣っているのは当然のこと。空腹で倒れたなんて緋菜に知られたらもうシヨック死してもおかしくない。

他の奴からは基本どう思われても構わないが、緋菜にだけは好感度MAX状態にあってほしい俺は足を早めて校舎へ向かうことにした。

ついでにはやての様子でも見に行つてやるか。

十

着替えを終え、教室から弁当を確保した俺は保健室へ直行する。

階段を降りてたまにすれ違う知り合いに軽い挨拶をしつつ廊下を歩き、保健室の前まで行くと中から何やら話し声が。

「大丈夫か、はやて？ さっきの体育に顔を出さなかったから心配したんだぞ」

「……………」

しかし餓鬼な奴はなぜか激しい憤怒の表情を浮かべる。

イラッ…………。

俺は入れ代わるようにレオンハルトの横を通り抜け、保健室に足を踏み入れると同時に。

「はっ」

鼻で笑ってやった。

「この……………」

なんて怒りに満ちた声が聞こえたが即座にドアを閉めて鍵を掛ける。

背後からドアを蹴る音も聞こえたが華麗にスルーしてはやてが使うベッドに腰掛けた。

「何をしたんや？」

上半身を起こしたはやてが聞いて来る。

「ちょっとムカついたから馬鹿にしてみた」

集った精霊たちが身体から抜けていくのを感じる辺り、レオンハルトは離れたのだろう。

「ほら、弁当持ってきてやったぞ」

実は俺、教室ではやての弁当も持ってきてあげたのだ。

「ま、まさか私の鞆を物色したんか！？ 乙女の鞆を！？」

「そんなわけないだろ、腐やて」

乙女なんていないし。

「腐やて！？ はやてのことか！ はやてのことかあああ！？」

「クリリンではないとだけ言うておく。アスキラ」

「サラツと吐いたな！ 私のデリケートゾーンに土足で踏み入れたな！？ これはもう言い逃れできへんでクレイクン！」

「悪かったって。でも俺が持つてこなかったらお前、昼食取れず午後からまたぶっ倒れるだろ、腐女子」

「それは感謝しとる　　って今度は直球！？」

ハイテンションなはやては無視して俺は弁当を開封する。

黒の長方形に半分収まるのは、黒ゴマの乗った白米。もう半分にはお浸しやら卵焼きやらたこさんウインナー（緋菜が好きなんだよね）やらさくらんぼやらが綺麗に分けられている。流石俺。料理が上手いぜ。

味の方はむしろ見た目以上に自信がある。

上機嫌で箸を取り出した俺はパクパクと腹を満たし始めた。それを見てはやても自分の弁当を食べる。

「それにしても、いやいやはやてさんも隅に置けませんなー」

「？ 何がや」

咀嚼した食べ物を飲み込んでにんまりと笑みを浮かべると、はやての箸が止まった。

往生際の悪い。

「さっき学園の王子様と親しげな会話をしてたじゃありませんか」

「……見てたんかい」

反応が期待外れだ。なぜ気落ちする？ ここは顔を赤くするとこころだろ！

「正しくは最後のほうだけ聞いていた、だが」

釈然としない苛立ち……。これが怒り……？

「同じようなもんや。変なところ見られてもったなー」

肩を落とすはやての反応を見る限り、

「お前、あいつが嫌いなのか？」

「嫌いつちゆうか何というか。ゼロくん、それに刹那くんも私の家族を救ってくれた恩人なんよ。そんな人にこんな気持ち抱くのは最低って分かっるとるんやけど……不気味なんや、あの二人は」

「……………続けて」

思わぬ収穫の予感に真顔になる。

魔導師には霊的要素は備わっていないはず。つまり直感ではなく確固たる理由があるのだろう。

「あの二人、何やなにもかも分かりきっているかのような行動をするんよ。まるで未来や結末を知っているかのような。聞いてみたらなのはちゃんとフェイトちゃんの時もそんな感じじゃったらしゅうて私らはちよつと敬遠気味なんやな」

未来……結末を知っているかのような　ね。それは想定外の情報だ。そんなレアスキルはカリムくらいだと思っていたが。

「ってか、続けてとか言っただけど何の話？」

知っているのに、こういう態度をする俺は性悪なんだろうな。

しまったと驚愕に目を見開いて口吃るはやてを眺めつつ、俺は食事再開させた。

M a i n E v e n t ? 4 (前書き)

悪魔降臨。卑怯万歳。

Main Event? 4

「諸君。別れの挨拶。則ち、さようならという言葉を慎んでおくらせてもらおう」

これが終わりの挨拶なんだからハムはともかく生徒側は齒の抜けたような気分になる。「起立、礼。さようなら」が懐かしく羨ましい。

言うなりサツサと教室から出ていくハムを半眼で一瞥する。

「本当、我が道を行く男に変貌したな。山田め」

「一年前は地味で冴えん痩せこけた中年やったのになあ。一体どうやって若返りしたんか目茶苦茶気になるわ」

「整形はしてないって言ってたし、本気で努力したんだろうな。動機は不純だが」

アニメのキャラに憧れましたなんて。

「さて、俺は帰らせてもらおう」

支度を済ませた俺は早々に席を立つ。

「クレイクン、いつも帰るの早いよね」

「小学校は中学より授業終わるの早いからなあ。一足先に帰宅して
る緋菜ちゃんに会いとつて溜まらんのやる」

「当たり前だ。お前たちにはあの子の可愛さが分からんのか？ 目
が腐っているのなら仕方ないが。緋菜が妹だったらもう誰もがシス
コンになって全身全霊の力を込めて愛でるのは普通の摂理なんだぞ」

「流石、キンブ オブ シスコン。言うことが違うわ。シスコンは
常識なんか」

「想像してみる。俺のポジションを自分に入れ替えて妄想してみる」
「……………」

はやては顎に手を当てて妄想して、

「妹さんを私に下さい！」

「死ぬ。いや、殺す」

そんな台詞は一生認めるつもりはない。

手に提げた鞆をクルクル回転させて勢いを付ける。狙うは後頭部。
角でやれば致命傷はいけるはずだ。

緋菜はやらん！

「理不尽やる！ 想像してみる言っただのはクレイクンちゃん！」

「それで言い訳付くと思ってるのか!？」

「何で私が怒られるんやー！」

「落ち着こうよ二人とも」

後は盛大に振り下ろすだけだったのに、月村が割って入り攻撃は中断された。

「離れる月村！ この世には綺麗事だけじゃどうにもならないことがあるんだ！」

「離れんとつてすずかちゃん！ この世の理不尽に私の命が風前の灯や！」

掻き消してくれよう！ 風前なんて生温いわ！

冗談抜きの攻撃に熱を注いでいると、不意に立ち塞がっていた月村が動く。

よし、狩れる ！

そう悟った俺は手に力を込める。

一狩り行こうぜ！

「と、思ったけど冷静さを取り戻したからやめます」

「そやな。私も特に言うことはないで」

たらたらと冷や汗を流しながら俺とはやては月村から離れる。

このやりとりをボケと感じたのか、彼女の手にはハリセンが握られていた。

しかも思い切り振りかぶっていたから手に負えない。

あの一撃を受けたら死ぬる。

既に経験済みのはやてなんて蒼白になってガクガク震えているし。

「じゃあ俺は帰らせてもらう。また明日な」

安全確保も含めて俺は一方的に告げると駆け足で教室を出ていく。

いや、危ない危ない。月村にあんな狂暴な一面を与えるなんてハリセン恐ろしや。余計なことしなけりやよかった。

速度を緩めて階段を降り、下駄箱で靴を履き変えた俺は歩幅を若干早くして帰途に着いた。

「…………ふむ」

帰途に着いていたはずの俺は異変に気付いて足を止める。

この道は俺の住むマンションに辿り着く最短距離。昔から物騒な

噂が絶えずすっかり人通りの少なくなった間道はいつも閑散として
いるのだが、今日は何か違う違和感を覚える。

建造物は少なく、見晴らしの良い周辺の景色を見渡す。

「……この感じ、どっかで」

昔は随分お世話になっていた気がするんだが。それこそ日常茶飯
事のレベルで。

しかもこの感覚の中、常に敵を蹂躪していたような……。

「あ、結界か」

なるほど。謎は全て解けた。

この閉塞感は結界の中にいるからだ。昔の俺はよく敵を結界に封
じ込めて楽しんでいたものだが……今回は立場は逆転。俺が封じ込
まれるパターンか。

現在俺の身体に魔力は存在しない以上、発動を瞬時に察知するこ
とは不可能だった。いつから閉じ込められたのかも定かじやないが、
犯人の目星は着いている。

「出て来いよ」

これで沈黙が流れたら目茶苦茶痛いな。シーンてなったらかなり
いたたまれないぞ。

しかもなんだ「出て来いよ」って気取った台詞。あらやだわ奥様

「だったら厨二病じゃない。ここは「その気配を消してる奴……出て来いやつ！」をチヨイスするべきだったな畜生。」

バトル漫画にしょっちゅう出て来る台詞を吐いて軽く死にたくなつた俺を尻目に、結界を張った人物はお約束通り現れた。

「何か用でございますかレオンハルトさん。用件は三文字でお願いします（棒読み）」

よし、名誉挽回汚名返上。「何の用だ」なんてつまらないしな。

背後の電柱からスツと姿を見せたレオンハルトは蒼と紅の瞳を陰しくさせて指示に従った。

「殺す」

わおっ

「理由は？ 三文字じゃなくて可」

「お前も転生者の一人なら分かるだろ」

……転生者？

この人往来でなんてこと口走ってんだ恥ずかしい。 転生者って何？ 頭おかしいんじゃない？

予想を上回る痛々しさにひくついた笑みを浮かべた俺を、この馬ハルトは更に勘違いをする。
「鹿は更に勘違いをする。」

「刹那と結託して他の転生者は全部殺したと思っていたんだが、まだ生き残りがいたとはな」

「勝手に納得してないで理由くらいは述べるよ。それくらいの権利はあるだろ」

「ねーよ。俺ら以外の転生者にそんな権利。PT事件と闇の書事件に参戦せずに虎視眈々と原作キャラに近付こうとする屑がっ」

また意味不明な単語登場。原作キャラ？ え？ 何この人、現実と二次元がドッキングしてるわけ？

「あゝ、とりあえず病院行く？」

「必要ねーよ！ お前がこれから行くのはあの世ただ一つだ！」

……恥づ。台詞恥づ。真顔で言ってるよ。

全力で俺が引いている中、痛い子は右手首に嵌められた腕輪を輝かせた。

「聖なる光！ エクスカリバー！ セットアップ！！」

掲げた腕輪が姿を変え、空間に生じた刀身や柄やら派手な装飾部品によって剣の形をとってゆく。

同時に、なんか厨二病全開の痛々しい台詞を堂々と吐いてもう末期なんじゃないかとむしる同情すらしかねないくらい馬鹿で愚かで羞恥の塊のような奴の制服がはじけ、新たな衣服がその身を覆う。

言うならお約束の変身シーン。この光が収まる頃には、絶対にこいつもう駄目だよね色々終わっているよね転生者？ 原作キャラ？ 意味分かんねーんですけど？ その存在も意味不明なら頭の方も意味不明なのですかこの野郎はバリアジャケットレオンハルトに包まれ、剣化したデバイスを構えているだろう。

成功すれば、ね。

斬ッ

「え？」

素っ頓狂で哀れな声が聞こえた。

俺は内心で嘲笑う。どんな理由だろうと一瞬の隙を見せたお前が悪いのだと。

精霊術は魔法とは違う。肉声は必要ない。術者の意志に応え、精霊は自ら進んで集い、自らの意志を術者に託す。

術者（俺）は願えばいいだけだ。願い、精霊を事象化させる。

願った形は風の刃。

俺とレオンハルトの距離は僅か十五メートル。人間の反射神経では絶対に回避不可能な神速の刃が具現化させる。俺の意志一つで手足のように動く刃が。

一閃。レオンハルトの右腕を斬り飛ばす。

一閃。レオンハルトの左足を斬り飛ばす。

一瞬かどうかも判断し辛い出来事にレオンハルトは自分の、宙を舞う右腕で左足視認できずに呆けた表情が張り付いたままだ。

自分達を脅かす存在の無残な姿に精霊は歓喜する。

俺が無関心の眼差しを向けていると、レオンハルトの右肩と左太股は思い出したかのように血飛沫を上げた。

変身はもちろん中断。バランスを失った身体が惨めに地に伏せる。

「あ……ああ……!!」

レオンハルトの脳がようやく現実を認め、理解の範疇を越えた激しい激痛が襲おうとする。

驚愕に目を見開く姿を見て、俺は次に奴が取る行動を予測して歩み寄る。

結界は既に解けていた。

「ああああ」

「黙れ」

勢いよく顔を踏み付けて唇を塞ぐ。

鼻の骨と歯が碎ける感触が伝ったが、だからどうした。

「 ! ! ! 」

さきほどまでの傲慢な態度は一変。恐怖と激痛に目からはダラダラと涙が溢れている。

「 ! ! ! 」

必死に何かを叫んでいるようだが、無視をする。絶対強者を誇る人間が地をはいつくばる光景は無様で仕方がない。

「まあ、あれだ」

平淡な声で言う。夕焼けの空を一瞥して、

「誰に向かって大層な口を聞いていた？ 糞餓鬼」

振り上げた足を今度は首目指して振り下ろした。

「た、助け」

どれだけ祈ろうとギロチンのごとく振り下ろされる足が止まることなどない。

強者の矜持を放擲したその言葉は、しかし最後まで言い切ることもできず、首の骨の碎かれる音に飲み込まれ、レオンハルトの意識と共に消滅した。

「……………」

俺は踏み付けた足を退けるとレオンハルトを放置して帰途に着く。

正直気になる単語が二つほど挙がったが、まあいい。こいつの正体も気になるんだが、既に事切れた後だから聞き直すことも不可能だし。

だが「刹那」と言った。つまり天乃川刹那はこの二つの単語の意味も、自分達の正体も知っているとということ。

「だからといって聞けないよな」

明日はゼロ・レオンハルトが死体で発見されたというニュースで持ち切りになっていることだろう。そんな状態で問い掛けるなんて告白しているようなものだ。

ひとまずこの疑問は置くことにしよう。

どうでもいい奴の命に何の関心も示さない俺は軽い足取りで自宅へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7009x/>

精霊術師と三人の魔導師たちと

2011年10月20日04時25分発行